

Elle était belle, ce matin !

(今朝、彼女は美しかった。)

倉田 清

ほとんど毎年夏には、フランスのオルレアン(パリ南方約100キロ)にある「シャルル・ベギー研究所」に籠るのが僕の学問的な喜びの一つである。

先年、ある朝、研究所へ行くと、所長のオーギュスト・マルタン氏がめずらしく訪ねて来たオルレアン市長で作家のロジェ・スクレタン氏とおしゃべりしていた。途中からなので、話題がはつきりしない。「Elle était belle, ce matin !」(今朝、彼女は美しかったね!)と、所長が感動したように眼を細めて言うと、市長が「Oui, vraiment, elle était très belle !」(うんほんとうに、彼女はとても美しかった!)と感慨深げにうなづいている。何の話をしているのだろうか。どこかの女性が美しい姿を二人に見せたのか。老人たちの顔がかわるがわる眺めて、こちらもほのぼのとした気分になった……「彼女」とは?僕も知っている美人で教養豊かなマダム・ブーデかな、と考える。……しかし、その「彼女」とはオルレアン市を流れるロワール河であった。フランスの中部を流れ、大西洋に注ぐ一番の大河である。確かに、朝霧に包まれたポプラや柳の生えた小島をいくつも抱えたこの清らかな、優雅な悠々たる流れは、誰にも深い感動を与えてくれる。河は生きている。ロワール河はオルレアンの人たちにとって、またその流域に住む人たちにとって生きた存在であり、その流れは彼らの心の中にある。

少し哲学的な傾向のある印象主義の文芸批評家ジュール・ルメートル(Jules Lemaitre, 1853 - 1914)がロワール河を描いて、祖国とは何かを見事に語っている。《Quand j'embrasse la Loire étalée et bleue comme un lac, avec ses prairies, ses peupliers, ses îlots blonds, ses touffes d'osiers bleuâtres, son ciel léger, la douceur épandue dans l'air et, non loin, dans

ce pays aimé de nos anciens rois, quelque château ciselé comme un bijou qui me rappelle la vieille France, ce qu'elle a fait et ce qu'elle a été dans le monde : alors je me sens pris d'une infinie tendresse pour cette terre maternelle où j'ai partout des racines si délicates et si fortes ; je songe que la patrie, c'est tout ce qui m'a fait ce que je suis, ce sont mes parents, mes amis d'à présent et tous mes amis possibles, c'est la campagne où je rêve, le boulevard où je cause, ce sont les artistes que j'aime, les beaux livres que j'ai lus》(湖のように青く広がったロワール河、その牧場、ポプラの木、黄金(こがね)色の小島、青白い柳の茂み、軽やかな空、大気中に拡がった穏やかさ、昔の国王たちが愛したこの国の、ほどなく遠いところに、古きフランスを思い起こさせる宝石のようにはめ込まれた城などを考えるとき、私はこの母なる大地に対する限りない愛情にとらえられるのを感じる。ひじょうに繊細な、そして、ひじょうに強い根を私はいたるところに持っているのだ。私は祖国を考える。それは、現在の私をつくってくれたすべてである。私の両親であり、現在の友人たちであり、これからの友人たちである。私がそこで夢みる田園であり、私がおしゃべりをする大通りである。私が愛している芸術家たちであり、私が読んだ素晴らしい書物である。]

悠久の大河ロワールの流域には、ルネサンス期の王侯貴族たちの居城が点在しており、風土の穏やかな、端正優美なフランス語と明晰な思惟の、正に《フランスの庭園》(la Jardin de la France)と呼ばれるに相応しい。誰にも理解できるこの美しい文章を名文家のアナートル・フランス(1844 - 1924)は暗記していたそうである。

レメトールは、少々右翼的な傾向の批評家であるが、その祖国の概念は故郷への愛、つまり郷土愛に基づいている。そして、かつての日本やドイツのように郷土愛が非人間的な政治に至ることはない。天皇制軍国主義やナチのゲルマン民族の徹底した排他主義はまったくない。フランス語や英語のnationは、主権の保持者である「国民」であり「人民」であって、〈民主的〉という内容をもつ。それに対して、ドイツの“ナチオナル”は、強力な偉大な民族というイメージを伴っていて、民族的統一の概念に当てはまる。トーマス・マン(1875 - 1955) が、「ドイツではネーションの概念そのものがない」といった洞察は、「自由」とはその概念がなかった日本ナショナリズムについて、われわれに反省を促すものであるが、とにかく、イギリスやフランスではnationは国民、人民であって民族、国家ではない。偉大な哲学者ヘーゲルが『国家論』の中で、「個人の自由は全体の中でなければ存在しない」と言っているのは、残念なことであるが、ドイツでは郷土愛が国家や民族に容易

に結びつく傾向がある。しかし、フランスやイギリスでは、郷土愛は、山河や街を背景とした人々の平和な営みを示しており、絶対に政治性とは結びつかないのではないか。素朴な深い感情がそこにはある。

「Elle était belle !」と感動的に語っていたスクレタン市長も、マルタン所長も、ナチス・ドイツの暴力に対して、人間の自由と尊厳を、その基盤である故郷を擁護したレジタンスの闘士であった。しかし、僕が敬愛した所長も市長も、今はない。

1542年ジャンヌ・ダルクが、また、1944年に一般市民がその侵略者から救ったこのオルレアンを訪ねる度に、ロワールに沿って散策しながら、時の流れを感じて、僕は果てしない水の清らかさを、火の明るさを、無限広さを憶う。そして僕は僕を思う。詩人シャルル・ベギーは、次のように詠っている。

Orléans, qui êtes au Pays de Loire !
(ロワールの国にあるオルレアンよ！)

★ お知らせ ★

第3回 英語教育研究大会開催

日時 92年11月21日(土) 13:00~19:00

会場 17号館215号室

後援 神奈川県高等学校英語教育研究部会・神奈川県中学校英語教育研究会

第2回 海外講演会開催

日時 92年11月24日(火)・26日(木) 17:30~19:30

会場 20号館205号室

講演者 Rod Ellis 氏(テンプル大学日本校教授・応用言語学専攻)

尚、前号で予告いたしましたAlan C. Charity氏は、健康上の都合により中止になりました。